

ヤンゴン素描 48

殺人鬼イングリマーラ（指鬘比丘）の改心

山形洋一

千人切りの犠牲者の指を紐でつなぎ首にかける男が、釈尊の前にひざまずきうなだれる。寺でよく見かける絵の物語。

『今昔物語』巻第一「鶯堀魔羅（おうくつまら）仏の指を切れる語（こと） 第十六」に、「今は昔、天竺（てんじく）に鶯堀魔羅（おうくつまら）という人ありけり。此の人は指鬘比丘（しまんびく）と云う人の弟子なり」とありますが、これは間違いで、鶯堀魔羅と指鬘比丘は同一人物です。

ビルマ語では「イングリマーラ」と訛りますが、もとのパーリー語 Anglimaala を漢字で写したのが「鶯堀魔羅」。殺した人の「アングリ＝指」をつないで「マーラー＝華鬘（けまん、花をつないで首にかける首輪）」にしたのが意識の「指鬘」です。ちなみにミャンマーでは女性の名に Marlar が、日本では「華鬘」が春を彩る野草にキケマン（黄華鬘）とムラサキケマン（紫華鬘）の名が用いられています。

アングリマーラは生まれる前から、殺人鬼になることが予言されていました。その将来を恐れた父親からアヒンサ（無害・非暴力）と名付けられ、当時学術の中心だったタクシャシーラ（現在のパキスタン国タクシラー）で猛勉強をしますが、学生仲間の嫉妬を買い、師匠から疎まれます。ミャンマーに伝わる伝承では、先生への詫びとして 1000 人の人の右手人差し指をさし出すことになり、1000 人目に自分の母親を狙っていたところを、お釈迦様に出会います。

アングリマーラは釈迦に追いつこうとするが、いっこうに追いつけない。「待ちやがれ」と声をかけると、お釈迦様は「私はじっと落ち着いているよ。欲望に心を乱してじたばたしているのは、君のほうだろう」と答えます。この声に打たれたアングリマーラは思わずひざまずき、教えを請います。『今昔物語』には、アングリマーラに請われ釈尊が自分の指を切って与えたとありますが、これも今昔物語作者の間違いです。

「比丘（修行僧）」に加えられたアングリマーラは、托鉢に出て住民から石を投げつけられますが、修行の甲斐あって、怒りの心を起こさずに戻ることができた。そのとき喜びを次のように語ったと、「鶯堀魔羅経」にあります。

「世尊、わたくしはもと、無害（アヒンサ）という名でありながら、愚かさのために、多くの人の命を損ない、洗えども清まらない血の指を集めたために、指鬘の名を得ましたが、いまでは三宝に帰依してさとり智慧を得ました。馬や牛を御するには、むちや綱を用いますが、世尊はむちも綱もかぎも用いずに、わたくしの心をととのえてくださいました。今日わたくしは、わたくしの受けるべき報いを受けました。生も願わず死も待たずに、静かに時の至るのを待ちます。」（（財）仏教伝道協会発行『仏教聖典』より）

中村元著『釈迦の生涯』によれば、アングリマーラ伝説は釈尊が亡くなられたあとに作られた「後代の仏伝」だそうです。道中で産気づいた妊婦を助け以来、妊産婦の守り本尊になるといふ、鬼子母神もどきの伝承も伝わっています。

悪の極致が善に転換するオセロゲームのようなロジックが想像力を刺激するらしく、『ウィキペディア』の「アングリマーラ」を覗いてみると、さまざまな絵や写真を見ることができます。（了）